

一人一人が人格者

ともに生きて④

賀川豊彦 活動開始100年

神戸・新生田川地区のスラムに住んで4日目、1909(明治42)年12月27日。賀川豊彦は安宿「阿波屋」の広間を借り、クリスマスパーティーを開いた。子どもたち約300人が集まり、一人一人に、恩師の宣教師マヤスから届いたおもちゃを分け与えた。

その後、賀川は日曜学校を開いたり、児童館を設置したりした。須磨海岸や明石に子どもたちを連れて行くなど、貧しい人々の中で

子どもたちのため

もとりわけ子どもたちに温かいまなざしを向け続けた。

「いと小さき者(最微者)に仕えよ」。賀川の神戸での活動拠点「イエス団」の理念の一つだ。イエス団は賀川の思いを受け継ぎ、保育園や幼稚園運営などの保育事業に取り組んでいる。

◇ 武庫郡瓦木村高木東口(現・西宮市高木東町)も賀川の活動拠点の一つだった。この地に、賀川が

現代に通じる九つの権利

建てた「一麦保育園」が今もある。関東大震災の救援活動を終えた賀川は26(大正15)年、東京から西宮に移った。5年後、ベストセラーとなった小説「一粒の麦」の印税で300坪の土地を購入し、翌年、農民福音事業の拠点「一麦寮」や一麦保育園が完成した。

1992年から15年間にわたって園長を務めた梅村貞造(80)「西宮市」は終戦後、疎開先の高知で初めて賀川に会った。当時高1だった梅村は、講演を聴いて「すごい人だ」と驚いたという。

「軍国主義的な価値観が大きく変わり、心よりどこを探していた」と振り返る。その後、京大に進学し、卒業と同時に京都の丸太町教会で洗礼を受けた。

一麦保育園は「一人一人を大切に」をテーマに、一斉保育ではなく自由形態の保育にこだわる。梅村は「一人一人は人格者」とい

う賀川先生の考えは、今も保育園経営の支え」と話す。

賀川が27(昭和2)年に発表した論文に「九つの子どもの権利」がある。「生きる」「食べる」「遊ぶ」「眠る」「教育を受ける」「指導してもらう」「虐待されない」「親を選ぶ」「人格としての待遇を受ける」の九つだ。

梅村は「賀川先生の着眼点は素晴らしい。現代社会にも十分通じる」と話す。今も保育園に通い、子どもたちと触れ合いながら、保育士らに願いを託す。「社会、特に子どもに仕えているという気持ち

ちを忘れないでほしい」

便所の口まで追いかけて私が出るのを待っている。／売られて行くのが悲しさに、／うらの戸口で半日泣いた、／今年十二の清ちゃん、私の可愛い女弟子!

賀川の詩集「涙の二等分」(1919年刊)にある「私の御弟子」の一節だ。貧しいゆえに売られていく子どもたちに対し、自分の非力を嘆いた。あふれる愛の底には悲しみの海がある。 敬称略 (河尻 悟)

⑤賀川ゆかりの写真を広げながら思い出や教訓を語り、梅村貞造さん。一麦保育園の経営に今も力を注ぐ西宮市高木東町3(撮影・岡田育磨) ⑥完成した新園舎前に並ぶ一麦保育園の関係者たち=1949年

